巻頭言

日本人と創造性

Japanese and Creativity

木村 高夫*
Tokao KIMURA

ハーバード大学の教授であり、駐日大使を務めたライシャワー教授は、その調査報告の中で日本の教育を「18歳のある一日にどのような成績をとるかによつて、その後の彼の人生が決定される」というふうに特徴づけている。この一言は大学でどの科目をどのように学ぶかではなくて、どの大学に入学するかがその人の一生を決めるという現在の日本の教育制度、ひいてはそれを取りまく社会制度に対する痛烈な批判である。

我々は明治維新以来、欧米先進国の水準に追いつくために社会科学の分野、あるいは自然科学の分野で必死に努力し、その結果、いまや自由世界ではアメリカに次ぐ経済大国へと成長し、かつては考えられなかつたほどの高い文化生活を享受している。しかしながら技術的側面から見た場合、今日の繁栄をもたらす原動力となつた技術革新、例えば今世紀においてはコンピューター、ロケット、原子力等で代表される新技術の開発、利用等においてどこまで我々は貢献したであろうか。我々は先進諸国の科学者、あるいは技術者達が既成の概念や技術の常識に挑戦して創りあげた創造的な新しい技術にいわゆる改良技術なるものを加えて、その成果をうまく利用しているだけではないのか。今後予想される世界の経済成長率の停滞に伴つて生じる国際貿易での摩擦、保護主義の台頭を抑えて、さらに我々がゆとりある豊かな生活を目指すためには、我々自身の手で創造的な技術の開発を行い、世界の経済の発展、活性化に積極的に貢献する必要がある。ところで、日本人という民族は巷間いわれているようにそんなに創造性が欠如し、模倣性の強い民族であろうか。

私は決してそうは思わないし、日本人は非常に勤勉で優秀な民族であり、その資質および知的水準は他の先進諸国の人たちに比べて決して劣つてはいないと思つている。

では何故、日本人の発明や技術開発には創造性が欠如しているのであろうか。私はその原因を現在の教育とそれを取巻く社会制度に求めたいと思う。

本来、創造という行為は既成の体系や権威に対する積極的な挑戦であり、また未知のものに対する飽くなきロマンの追求であり、そこでは何ものにも邪魔されない自由な精神の発揚と行動が必要とされる。ところが現在の日本の教育においては、このような条件に対する認識、条件の整備の重要性が十分に理解されていないのではないかと思う。私はここに最大の問題があると思つている。すなわち、日本の教育というものは、知識なるものを画一的に教える消極的な受身のものであつて、個人の持つてい

*古河アルミニウム鋳技術部長

る能力を引き出してそれを積極的に伸ばそうとする能動的なものではない。小学校、中学校、高校における教育は範囲は広いが、内容は平板で魅力がなく、個々人の持つ多様性に対応したり、あるいは潜在的な能力を引き出す個性的な試みもなく、きめられた枠の中で終始している。その極め付きが共通試験のように感じられる。また、そこには小学校から中学校へ、あるいは中学校から高校へ、さらに高校から大学へと能力に応じた飛び級という発想もない。したがって、一部の例外的に優秀な者は自己の持つ才能を教育とは関係なく開花させる機会を見つけることができるが、大多数のものは才能が埋もれたままに終る可能性が高い。

さらに、学問の終点と看做されている大学についても誤った認識、理解とともに幾つかの問題があるように思われる。ここでは二、三の問題点を指摘しておきたい。

そもそも大学というところでは、最高のレベルの教育がなされなければならないのは勿論であるが、そこはそれまでの学問の終了点ではなくて、そこで学んだ学問、経験を基礎として将来希望する分野において未知の問題を独自で解決できる能力を身につけることができる単なる出発点にしか過ぎないことを認識すべきであろう。したがって、大学における教育もその方向に沿って創造性を高めるようになされるべきであろう。ここでは一例として教科内容を取りあげてみたい。調査によると日本の大学と欧米の大学との間には、特に工学系においてはその教科内容に大きな差があるといわれている。すなわち、日本においては基礎自然科目の比率が少なく、ハンドブック的な内容の専門科目が多いのに対して、欧米では逆に基礎科目の比率が高くて専門科目が少なく、かつ日本では随時に行う試験や宿題が少ないのに対して欧米ではこの種の試験が非常に多い。すなわち、欧米の教育は基礎科目の充実を図り、全科目を体系的に展開させて応用力と豊かな構想力を持つように厳しく鍛えることに主眼を置くのに対し、日本では基礎学力よりも実際の知識のみの習得に重点を置きすぎた教育になつているように思われる。さらに、多様性を要求する教育を実現し、教科科目の充実を図るためには同一大学であつても他学科、他学部の科目の履修を容易にすること、また、大学間の単位の互換性を実現することが急務であると考えられるが、現状においてはまだその気運が醸成されてはいないようである。

一方、日本の大学においては入学は非常に難しいが、卒業は非常にやさしいといわれる。端的にいえば、入学というパスポートさえあれば、どんなに難しい大学でも簡単に卒業することができる。「ハーバード大学の学生寮の灯は12時に消え、MITの灯は午前2時に消える」という話は日本にはない。昼間から喫茶店や雀荘が若い学生に占領されるという光景は世界広しといえども日本だけにしかないものである。本来大学は真に大学卒にふさわしい識見と能力を身につけた学生のみ卒業させるべきであつて、ただ大学に入学して在学したという理由で卒業させてはならないはずである。したがって学問を研鑽したいと志す者には門戸を広くしてできる限りチャンスを与え、勉学にもいそしまず、大学卒としての能力が身につかない者は篩にかけてどんどん落とすのが、本人に対しても社会に対しても望ましい姿であろう。

以上、今後我々に必要とされる創造性に関連して現在の教育の持つている問題点を思いつくままに述べたが、この問題はひとり教育にあるのではなくて企業サイドにも同様に多い。我々企業人としても「隗より始めよ」といわれているようにまず対策の一環として、手始めに有名一流大学卒業生を青田刈りするが如き態度をなおすことから歩を進めていくべきではないか。